竹田敏君の逝去を悼む

竹田敏君（10組）の逝去を衷心より悼みます。

亡くなって一カ月近く立ちますが、月命日に先立って昨日（3/19）、つくばのご自宅を訪問し、焼香すると共に奥様にお話を伺いました。

竹田君とは直接的な仕事上の付き合いは無かったものの、ここ10数年は彼が長年所属した（独）農業生物資源研究所の同僚・後輩との仕事上の付き合いは多く、一緒に仕事が出来なかったことは甚だ残念です。　竹田君とは高校・大学と同期であっただけでなく、フランス政府給費留学生として夫婦共々フランスに滞在（竹田君はボルドー、私はパリ）した経験の他、ライフサイエンス関連業務にてつくばに職を得て働いたことなど共通点が多いことは認識していたのですが、本日、奥様にお会いして、彼が最後まで留学以来のフランスの友人知人を大切にしたり、（ボルドー）ワインとチーズを愛し続けたこと、テニスも好きであったことを知りました。　その他の行動パターンも私のそれと極めて良く似た研究者に良く有るスタイルだったようです。

私は同期会以外でも竹田君につくばセンターのバス乗り場で何回か会ったり、筑波大学附属病院でばったり会ったりしているのですが、身体の事に関しては何も話してくれませんでした。尤もがんがあちこちに転移していることは身内と最後の職場である浜松ホトニクス㈱の限定されたメンバーにしか話しておらず、農業生物資源研究所の元同僚にも話さず、在任中から主宰していたワインの会の近日中の開催提案を聞いていた研究者達は非常に驚いたとのことです。　抗癌剤治療が始まってもげっそりと痩せるようなことは無く、つい半年ほど前に覚悟の上撮った遺影も元気そうな立派な姿でした。

「もっと話をしたかった、一緒に飲みたかった」と言うのが今の偽らざる心境です。

本人も認識していたがんの兆候は数年前からあったようですが、奥様が3年前に強引に病院に連れて行くまで、楽天的に考えていた様子です。　奥様は遺品整理をしている中で彼の「健康関連情報のファイル」の中に精密健診を促す健康診断結果の文書を数日前に見つけ、「40数年の付き合いなのに！」と無性に腹が立ったそうです。

呼吸困難を訴え、筑波大学附属病院に救急搬送されたのですが、救急車には自力で歩いて乗車したり、その夜遅くには翌日病院まで持って来て欲しいものをメールで奥様に指示するなど、一見緊急性は無さそうだったのだそうですが、次の日の早朝に他界されたそうです。

エンディングノートを準備し、自分の葬儀の事、埋葬の事まで用意周到に指示していたようで、ご本人も、ご家族もそう遠くない死は覚悟していたものの、余りにもあっけない死だったご様子で、勿論奥様もびっくりされたとのことですが、何よりもご自分自身がびっくりされたのではないかと奥様は仰っていました。

長野県・郷里に対する思い入れには非常に深いものがあり、報道中に「長野」とか「上田」と言う表現があれば非常に強く反応し、また機会あるごとに「信濃の国」を歌ったり、お子さん達に関する書類準備の利便性のために本籍を上田からつくば市に移したことは最後まで悔やんでいたとのことです。

ライフワークとして続けていらっしゃった上田の蚕業と世界との繋がりに関する著作が近日中に出版される予定だったのですが、それを見ることなく逝かれたのはさぞ心残りだったのではないかと思います。

セミ・リタイア後の社会貢献・後進指導にも積極的に貢献されていこうとお考えだった様子です。　本当に惜しい友人を亡くしました。　心よりご冥福をお祈りします。

2014.3.20

原田　義則（3組）